

大元神社古墳測量調査報告書

2006年3月

高知大学人文学部考古学研究室

大元神社古墳測量調査報告書

2006年3月

高知大学人文学部考古学研究室

例 言

- 1 本書は高知県香美市土佐山田町楠目に所在する大元神社古墳と大元神社北古墳の測量調査報告である。高知大学考古学調査研究報告第2冊として発行する。第1冊は昨年度発行した高知大学考古学研究室編『朝倉占墳測量調査報告書』を指す。
 - 2 本調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となり、調査を実施した。調査は、清家章（人文学部助教授）が担当した。
 - 3 本調査は2005年度高知大学人文学部「学部長裁量経費（科研費展開型）」の研究助成を受けて実施した。
 - 4 調査期間は2005年7月27日から8月13日である。
 - 5 写真の撮影は清家が主として担当した。
 - 6 挿図のうち、図1～3の方位は真北を示し、図8の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
 - 7 調査には高知大学大学院人文社会研究科大学院生・人文学部考古学ゼミ生ならびに地域変動論コース2年生が参加した。
- 参加者は以下のとおりである。桥家豊（高知大学大学院）・赤畠資佳・河崎愛・齊賀智子・林君平・大森麻衣子・鈴江祐・鈴木薫也・中井紀子・矢部俊一・渡辺可奈子・岡本治代・吉川裕子・渡辺峻（以上、高知大学学生）。
- 8 調査の実施にあたり、大元神社・株式会社トヨタ部品四国共販・高知県教育委員会・高知県文化財団埋文化財センター・土佐山田町教育委員会・地元自治会・八王子宮の諸団体、ならびに甲藤栄一・小林麻由・楠目和彦・名本二六雄・松田直則・山本哲也・和田和親の皆様より多大な協力をいただいた。
 - 9 本書の執筆は、清家・大森・桥家・矢部が担当した。分担は文末に示した。
 - 10 本書の編集は清家が担当した。

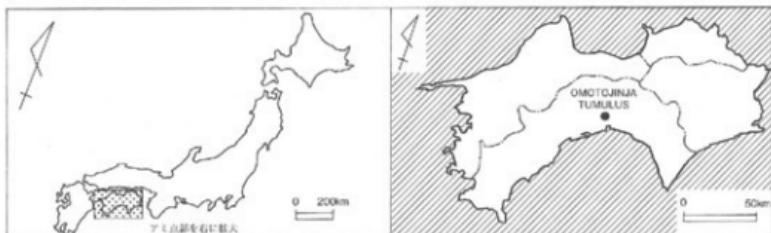


図1 大元神社古墳の位置

目 次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の遺跡	1
2 大元神社古墳の立地	3
3 謝辞	4
第Ⅱ章 調査成果	5
1 大元神社古墳	5
2 大元神社北古墳	5
第Ⅲ章 まとめ	9

図版目次

図版

1 1	大元神社古墳の立地（右手前は神母古墳）
2	神母古墳
2 1	大元神社古墳墳丘（東から）
2	大元神社古墳墳丘（北から）
3 1	大元神社古墳墳丘中央部の現状
2	大元神社古墳横穴式石室石材
4 1	大元神社北古墳（南から）
2	大元神社北古墳横穴式石室（狭道天井石）

挿図目次

図1	大元神社古墳の位置（鈴江製図）	iii
図2	大元神社古墳の立地（大森製図）	1
図3	周辺の主な古墳（渡辺可製図）	2
図4	前行山1号墳横穴式石室（鈴木製図）	3
図5	作業風景	4
図6	調査中の1コマ	4
図7	大元神社北古墳墳頂の五輪塔	6
図8	大元神社古墳・大元神社北古墳墳丘測量図（鈴木製図）	7～8

第Ⅰ章 調査経過

1 周辺の遺跡

大元神社古墳は香美市土佐山田町楠目に所在する。土佐山田町は南国市及び高知市から見て北東方向にあたり、現在においても香川県、徳島県方面に向かうまでの重要な交通ルートとなっている。現在の土佐山田町の中心街は高知平野北東部、物部川によって形成された河岸段丘上に位置し、大元神社古墳はこのような河岸段丘の北に広がる四国山地系の山々の麓付近に位置している。

土佐には、古墳時代前半期に属する古墳は極めて少なく、また明確な前方後円墳も未だ確認されていない。前半期にさかのぼる可能性のある古墳は、幡多地域には宿毛市高岡山古墳群と宿毛市曾我山古墳群、高知平野には、南国市長臥2号墳と南国市狹間古墳などがわずかにあるのみであり、よって、土佐の古墳のほとんどは横穴式石室を内包する後期古墳である。

高知平野においては南国市を中心とする高知平野東部地域に主に古墳が分布する（図3）。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳は南国市に所在する長臥4号墳であり、

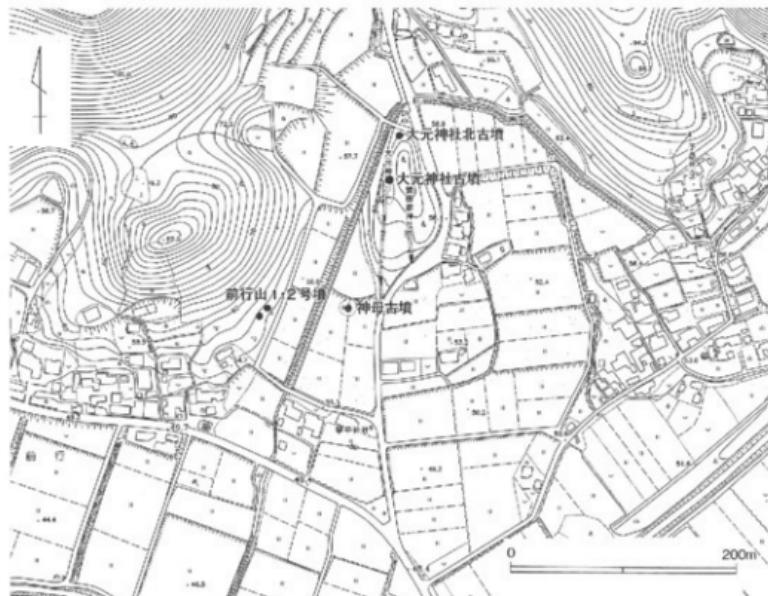


図2 大元神社古墳の立地

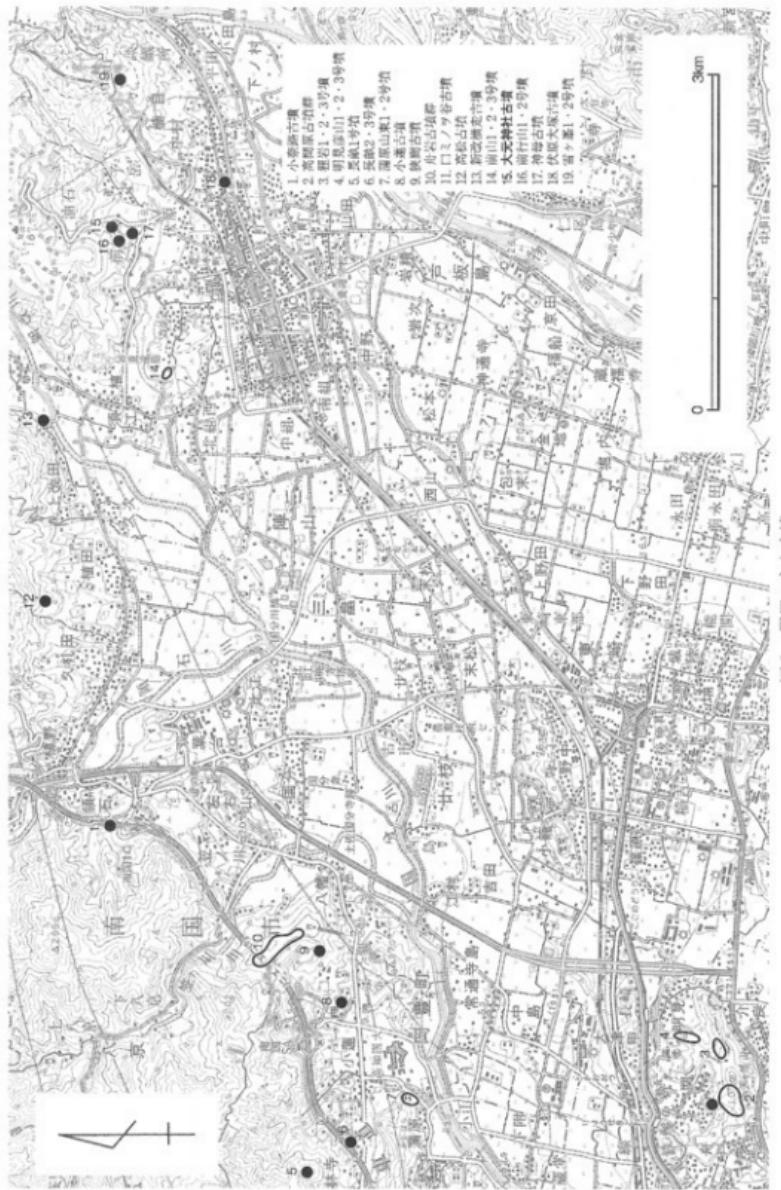


図3 周辺の主な古墳

TK10型式期の須恵器を出土している。その後、南国市には蒲原山古墳群、高知市には高間原古墳群などが続いて造営され、土佐山田町では県内で唯一埴輪を持つ伏原大塚古墳が築造されたと考えられる。

その後、TK43型式期からTK209型式期にかけて高知平野の北東部に広がる丘陵上に多くの横穴式石室墳がつくられる。南国市においては高知県最大規模の古墳群である舟岩古墳群や、土佐三大石室のひとつである小蓮古墳などがその代表として挙げられるが、この時期には土佐山田町においても大規模な横穴式石室と金銅装の馬具などをもつ新改横走古墳をはじめとして上改田古墳、前行山古墳群など、比較的多くの横穴式石室墳が造営される。

今回調査した大元神社古墳および大元神社北古墳は、過去には調査が行われておらず、遺物なども発見されていないが、墳丘の規模や石室に使用された石材などから高知平野における後期古墳築造の流れから大きく外れることはないものと考えられる。未調査の古墳が多い土佐山田町の古墳の様相を探る上で重要であると考えられる。
(橋家)

2 大元神社古墳の立地

大元神社古墳は、廣田1979において大元神社裏手古墳（前行山3号古墳）と記載されている古墳である。同じく大元神社北古墳は、同書で大元神社東側古墳（前行山4号古墳）と記される古墳である。現在は、大元神社古墳ならびに大元神社北古墳として遺跡地図に登録されている（高知県教育委員会編1998）ので、この名称を用いる。ともに未調査で墳丘測量図や石室実測図などの基礎資料が作成されたことはない。大元神社古墳は石室部分を大きく削平され、大きな石室石材が露出しているが、これは石室奥壁の石材であり、それ以外の天井石や側石は全て取り除かれているという（廣田1979：p.110）。このような大規模な破壊が行われているので、副葬品等の遺物も破壊の折に古墳の外に持ち出されていると思われるのであるが、現在、古墳に伴う遺物は何一つ伝わっていない（廣田1979：p.110）。

大元神社古墳ならびに大元神社北古墳は、土佐山田ゴルフクラブが存する丘陵のさらに南にある丘陵上に存在する（図2）。土佐山田ゴルフクラブのある丘陵から南西と南東方向に尾根が伸びており、その中央部分は扇状地形を呈している。その扇状地形の付け根部分に、古墳のある丘陵は位置している。古墳のある丘陵の西側の麓には流路が走り、東側は丘陵の裾部を道

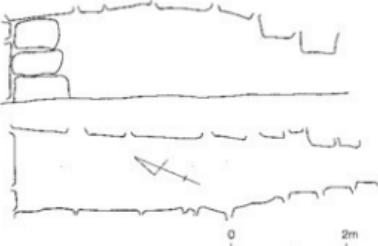


図4 前行山1号墳横穴式石室（廣田1979を再トレース）

4 大元神社古墳の立地



図5 作業風景

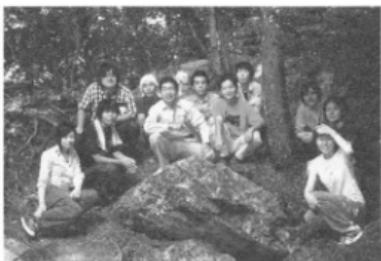


図6 調査中の1コマ

路が走って東側にある集落と画している。古墳のある丘陵は、周囲が水田に開まれていて独立丘陵状に現状では見えているが、もともと北西の丘陵から派生した尾根であった可能性もある。大元神社古墳は、この丘陵の最高所よりもやや西に偏った大元神社社殿の北側に存在する。大元神社北古墳は、丘陵の北側裾部にある（図2）。

大元神社古墳は単独で存在するのではない。大元神社北古墳・神母古墳・前行山1号墳（図4）・前行山2号墳・前行桜ヶ谷1号墳・前行桜ヶ谷2号墳が周囲にある。しかし、いずれも未調査でその内容はよくわかっていない。

（矢部・清家）

3 謝 辞

本調査を遂行するに当たり、大元神社ならびに八王子宮宮司の甲藤栄一氏には古墳の調査を快諾していただけただけではなく、作業の円滑化に関してさまざまな援助を賜った。高知県文化財団埋蔵文化財センターの山本哲也氏には、調査前から適切な助言をいただいた。このほかにも株式会社トヨタ部品四国共販・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・土佐山田町教育委員会・地元自治会、ならびに小林麻由氏・楠目和彦氏・名本二六雄氏・松田直則氏・和田和親氏をはじめ多くの方々から多大な援助を得た。記して感謝の意を表したい。

（清家）

参考文献

- 高知県教育委員会編 1998『高知県遺跡地図』高知県埋蔵文化財調査報告書第43集、高知
廣田典夫 1979「考古篇」『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、高知：pp.37-154

第Ⅱ章 調査成果

1 大元神社古墳

大元神社古墳は大元神社の存する丘陵上にある。本丘陵には大元神社古墳と大元神社北古墳の存在が知られている。丘陵の頂部近くに大元神社古墳、丘陵の北側裾部に大元神社北古墳がある。

丘陵の最高頂より北西側にやや下がったところに大元神社社殿がある(図2)。その社殿の裏、北側に古墳は位置する(図2・図8)。古墳の中心部は、長さ8m・幅4mにわたってコ字状に大きく削りこまれている。この中心部の削平部分の最も奥側には長さ1.8m、幅0.8mの巨石が露出しており(図版3-2)、この存在からおそらくこの中心部には横穴式石室があったと考えられている。露出している石材は石室奥壁の部材であるとされている(廣田1979:p.110)。この石材以外に石は確認できていない。したがって、石室の規模や形態ならびにどの程度石室が遺存しているかは不明である。出土遺物も知られていない。

墳形は、最終的には発掘調査が必要であろうが、測量図ならびに現地で墳形を確認する限り円墳である可能性がきわめて高い(図8)。便宜的に社殿の位置する方向を南、大元神社北古墳のある方向を北として記載をすすめる。墳丘の南側は社殿によって一部墳丘が削平されている。墳丘の東側ならびに北側は等高線が弧状を呈しており、墳形が円墳である可能性を示している。墳丘西側の等高線は直線的に走るが、この等高線から墳形を推測することはできない。なぜなら、古墳は丘陵の中心よりもやや西側に位置している。丘陵の西側は全体的に傾斜が急であり、古墳の西側は崖面をなしている。墳丘の西側はこの急傾斜に盛り土を施して形成した可能性が高い。そのため、盛土が流出した可能性が高いと考えられる。墳丘の原形を比較的良好にとどめていると思われる墳丘北部と東部の等高線に再び目を向けると、標高66.0mから標高65.0mまで等高線が密であり、標高64.5mから標高64.0m以下では等高線の幅が広くなり傾斜が緩くなる。現状では、墳丘の裾部を標高64.5mに考えることが妥当であろう。そう考えた場合、墳丘は直径約15m・高さ25m以上の円墳とすることができるだろう。

横穴式石室があることから古墳時代後期に属するということは言えるのであるが、古墳に伴う遺物は知られておらず、細かな時期は確定できない。
(清家)

2 大元神社北古墳

大元神社北古墳は、大元神社古墳から谷を挟んで北へ約40mの場所にある。古墳の東側には町道が走り、西側は崖に接している。その崖下を水路が通っている。

墳丘の現状を見ると現在でも高さ約1mの墳丘の高まりを確認することができ、旧地形を残



図7 大元神社北古墳墳頂の五輪塔

す部分も多いが、後世に改変を受けたと見られる箇所も認められる（図8）。墳丘の東側は、ガラスやビニール等のゴミが堆積している。石室の入り口付近もゴミで埋まっている状態であり、墳丘の形態を反映しているとは考えにくい。墳丘の南東にある高まりも後世の改変の跡であると考えられる。

墳丘の南西部には幅1m程の溝状の落ち込みが認められる。これは古墳の周溝である可能性があり、その想定が正しいとすると墳丘の裾部は標高61.0mあたりにあると考えられる。また、コンターラインが円形を呈していることから古墳は円墳であり、標高61.0m周辺を墳丘の裾部として石室を中心に復元すると、直径9～10mの円墳となる。

墳丘の南東部に石室の羨道の天井石が2つ露出しており、その北西側、つまり墳丘の中央部に約3×4mの落ち込みが存在する。これは玄室の天井石が落ち込んだ痕跡であると考えられる。羨道部入口には人頭大の穴があき、中をのぞくことができる。ここから見ると、羨道の幅は100cm強で、現在の入り口から100cm余りで左右に広がっており、このことから両袖の玄室であろうと思われる。玄室幅は不明であるが、目測では1.5m未満と思われた。玄室の長さは不明である。

古墳の副葬品をはじめとする古墳時代の遺物は知られていない。ただ、墳頂部で認められた落ち込みの北側で五輪塔の破片が見つかっている（図7）。いつ古墳に持ち込まれたものかはわからないが、古墳の墳丘を後世に再利用する事例が近年再び注目されている（石尾1999、林2005など）。この五輪塔は、そうした後世における古墳の再利用が大元神社北古墳でも存在した可能性を示すので興味深い遺物である。

(大森)

参考文献

- 石尾和仁 1999「中世社会と『古墳』」『眞朱』第3号 徳島県埋蔵文化財研究会、徳島：pp.55–65
 廣田典夫 1979「考古篇」『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、高知：pp.37–154
 林 正憲 2005「中・近世社会における古墳」『井ノ内稲荷家古墳の研究』大阪大学大学院文学研究科考古学研究報告第3冊、大阪：pp.499–513

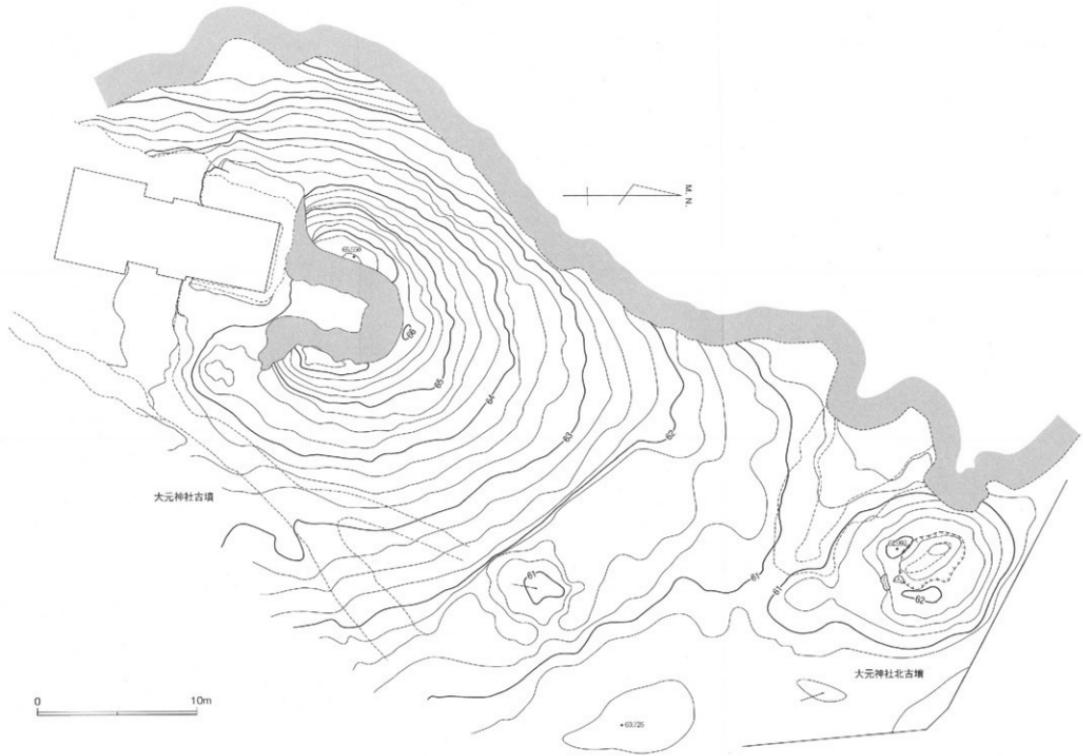


図8 大元神社古墳・大元神社北古墳埴丘測量図(アミ点部は塗面)

第Ⅲ章 まとめ

測量調査の結果、大元神社古墳は直径約15m・高さ2.5m以上の円墳である可能性を示した。最終的には発掘調査を待たねば確定できないが、この想定は大きくはずれるものではないだろう。同様に、大元神社北古墳は、直径約9~10m・高さ1m以上の円墳であることも明らかとなった。

大元神社古墳が直径15m程度の古墳であるとすると、土佐の後期古墳でどのような地位を占める存在なのであろうか。直径15mといえば、他地域においてはむしろ小規模ともいえるのであるが、土佐においては決して侮るべき存在ではない。

土佐において最大の後期古墳である香美市伏原大塚古墳は1辺34mの方墳である（廣田編1993）。それに続く規模の古墳としては南国市小蓮古墳があり、現状から28m×22mの楕円形の古墳と推測されている（廣田1972）。小蓮古墳とともに土佐三大古墳とされる高知市朝倉古墳は直径（1辺）20m（高知大学考古学研究室編2005）、南国市明見彦山1号墳は直径14m（高知大学考古学研究室編2006）である。直径15mの墳丘は、土佐において最大グループとはいえないが、それに準じる規模の古墳であることが理解できる。

また、土佐では、舟岩古墳群を除くと古墳が群集することは少なく、2~3基の古墳が点在するように分布しつつ、1つのグループを作ることが多い。しかし、大元神社古墳の周辺には大元神社北古墳・神母古墳・前行山1号墳・前行山2号墳が知られている上に、前行山1・2号墳周辺にはさらに古墳が存在する可能性がある。つまり、大元神社古墳は、土佐では比較的数の多い古墳グループの中にある。いずれの古墳も発掘調査が行われていないので、古墳の詳細は不明であるものの、大元神社古墳はその中で大きな古墳であり、それらの古墳を睥睨するかのように周辺の古墳を見渡す丘陵頂部に位置する。このことから大元神社古墳の被葬者は周辺の古墳の被葬者を配下に置く楠目一帯を治める小首長であったという評価も可能である。

しかしながら、大元神社古墳は土佐を代表するような盟主墳的存在でもないのも事実である。同じ香美市土佐山田町には先に示した伏原大塚古墳や墳丘規模は不明ながらも土佐三大古墳と同等規模の石室を持つ新改横走古墳が存在する。これらの古墳被葬者が土佐山田一帯を代表する首長であったと思われる。こうした首長と大元神社古墳被葬者の関係がどのようなものであったのかが次に問われる事になるが、調査された古墳も少ないので解答を示すことは困難である。ただ、このような視点は、古墳時代後期における土佐の階層構造ならびに支配構造を明らかにする上で重要であり、律令国家へ向けて走る中央政権の動きに対する土佐側の対応を考える上でも重要である。土佐では、墳丘測量図や石室実測図のない古墳が

多い。今回行ったような測量調査などを地道に続けることにより、上記の課題に迫っていきたいと考えている。

(清家)

参考文献

- 高知大学考古学研究室編 2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知
高知大学考古学研究室編 2006『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第3冊
高知大学人文学部考古学研究室、高知
廣田典夫 1972「高知県南国市小進古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪：pp.21-28
廣田佳久編 1993『伏原大塚古墳』土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第14集 土佐山田町教育委員会、高知

図 版



(1) 大元神社古墳の立地（右手前は神母古墳）



(2) 神母古墳



(1) 大元神社古墳墳丘（東から）



(2) 大元神社古墳墳丘（北から）



(1) 大元神社古墳墳丘中央部の現状



(2) 大元神社古墳横穴式石室石材



(1) 大元神社北古墳（南から）



(2) 大元神社北古墳横穴式石室（後道天井石）

【報告書抄録】

ふりがな	おおもとじんじやこふんそくりょうちょうさはうこくしょ				
書名	大元神社古墳測量調査報告書				
図書名	高知大学考古学調査研究報告				
シリーズ名	高知大学人文学部考古学研究室（編者：清家 章）				
シリーズ番号	第2冊				
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室				
発行機関	高知市曙町2-5-1				
所在地					
所収遺跡名	所在地			コード	
大元神社古墳	香美市土佐山田町梅日小学前行大元			市町村	遺跡番号
大元神社北古墳				323	
北緯	東經	調査期間		調査面積	調査原因
33° 36' 49"	133° 41' 46"	050727~050813			学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	著記事項
大元神社古墳	古墳	古墳時代	古墳		
大元神社北古墳					

大元神社古墳測量調査報告書

—高知大学考古学調査研究報告第2冊—

2006年3月発行

編集 高知大学人文学部考古学研究室
発行 〒780-8520 高知市曙町2-5-1

印刷 有限会社 西村謹写堂